

2011年度 財団法人交流協会フェローシップ事業 成果報告書

## 三島由紀夫「孔雀」試論

国立高雄餐旅大学

黄如萍

招聘期間 (2011年7月7日～8月5日)

2012年3月

財団法人 交流協会

# 三島由紀夫「孔雀」試論

黄如萍

国立高雄餐旅大学 応用日語系助理教授

## 一、先行研究と問題意識

「孔雀」は昭和四十年二月号『文学界』に発表された後、新潮社から刊行された『三熊野詣』（昭和四十年七月）に収録された。一篇は二十七羽の印度孔雀が殺されたため、刑事がその犯人を調査するという内容である。研究史において、この作品に関する論考は数多く論じられてきてはいない。

三島は単行本<sup>1</sup>のあとがきで「美の殺戮者としての美少年の永生」として作品における美の問題について指摘してきた。また、作品発表当時の書評で、磯田光一は「孔雀が、いわば人間の『生』の根源的構造としての『滅亡の美学』につながっている」<sup>2</sup>「醜悪な「世俗」に対する「滅亡の美学」」<sup>3</sup>などように、作品に描かれた滅亡と美の主題について論じてきた。

一方、『孔雀』は昭和三十九年十月に横浜ドリームランドで起こった孔雀惨殺事件を参照に書かれているため、当時の事件と結び付けて論じた論考も見られる。例えば、高場秀樹<sup>4</sup>は「孔雀を素材となった事件記事と比較することで、その技法について考察」してきた。また、久保田裕子<sup>5</sup>は「孔雀」の記述と事件の詳細とを比較し、「事件がどのように作品の枠組みとして生かされているか」を考察している<sup>6</sup>。

以上のように、作者の言説や、実際の事件といった作品外の要素と作品との関係を意識する必要は当然あるだろう。しかし、本論は作品を一つの独立した世界と考え、論じるという立場をとるため、「孔雀」を、作品外の事項などに頼ることなく、作品世界に重点をおくことにする。作品内における諸要素を考察することで、本作品の主題を捉え直すことを目的とする。

## 二、読者を暗示すること

「二十七羽の印度孔雀が殺され、その記事が夕刊に出て、富岡が一種の感動を受けているうちに、明る晩刑事が来たのであつた」から、富岡は一体何のために感動をしたのだろうか。

---

<sup>1</sup> 『三熊野詣』前掲書

<sup>2</sup> 『図書新聞・文芸時評』昭和四十年一月三十日

<sup>3</sup> 『日本読書新聞』昭和四十年九月二十日

<sup>4</sup> 「三島由紀夫『孔雀』覚書」一小説技法より見た読解を中心に一 京都語文、第十一号、平成十六年十一月

<sup>5</sup> 「美の転位—三島由紀夫『孔雀』論—」『人間文化研究年報』第十五号、平成三年

<sup>6</sup> それ以外に、「孔雀」と能楽との論考も挙げられる。高場秀樹『「孔雀」と能楽』『京都語文』第五号、平成十二年三月

ここで読者は孔雀殺しという異常な出来事に感動を覚えていることに疑問を持ち始めるであろう。

そして物語は刑事の目を通して語られている。刑事の「その（富岡家の）装飾がふつうの常識とはどことなくちがつてゐるのを感じた」から、富岡家は普通の常識と離れていることを読み取ることができる。さらに、「炉棚の上の孔雀の置物」「壁には孔雀の群れ」「繊細なガラス細工の孔雀がある」「孔雀を象った」などの具体的な家の装飾によって、「主人が孔雀に特別の愛着を持つてゐることは歴然とわか」ったのである。そこから、読者に富岡が孔雀との関係を意識させている。ただし、読者はここで富岡は孔雀殺しの犯人だと判断することがまだできない。

しかし、刑事の視点に従いながら、富岡家にある美少年の写真には、「その顔には何かしら不吉なものがあり、これはやすいほどに繊細であればあるほど、何とはなしに玻璃質の残忍さが漂つてゐる」と語られている。M遊園地に放し飼いの美しい孔雀を殺した残忍な犯人は、その写真からもたらされた「玻璃質の残忍さ」との繋がりをほのめかされていると言える。富岡家にある写真などから、「ここの家の主人が常人ではないといふ予断を持つた」という刑事の判断から、常人である刑事とは対照的に、常人ではない富岡像が確認されたのである。このように、読者は「常人ではない」人の話を期待させられていくことになる。それと同時に、「常人ではない」富岡は、孔雀殺しという常識はずれな事件と深く関わっていることも容易に考えられる。このことは、孔雀殺し事件に繋がる重要な伏線を暗示していると言えよう。ここで、刑事の果たす役割は、富岡の〈異常〉性を際立たせることでもある。

### 三、「匙を投げた」刑事

一見、刑事は富岡を尋ねて普通の会話を行ったように見えるが、実際、刑事の「訊問が良人に移」ることから、この訪問事体は犯人探しの「訊問」と刑事に認識されていることがわかった。そして、この「訊問」の結果は、何故「匙を投げた」結果になったのか。以下は、刑事の「訊問」を改めて検証する。

本作の「一」で示されたように、「二十七羽の印度孔雀が殺され」、富岡はその孔雀が殺される前日「一人で二時間あまりも孔雀を眺めてゐる」ため、刑事は富岡家を訪ねたのである。当然、「孔雀を眺め」ることと、孔雀殺しの犯人であることとは直結できないため、調査を始めたわけである。

「訊問」の前に、刑事は富岡が孔雀殺しの犯人である可能性の方向へ傾斜していることが理解できる。

- ・ 「御主人だけに折入つてお話したいことがあるのですが……」／と、立ち去らうとしない

細君に困って、刑事が言ひかけると、／「何故私がみちやいけないんです」と、声量のあ  
る、怒気を含んだ、抽象的なほど美しい声が叫んだ。「どうせ孔雀のお話なんですよ」／  
「いや、これは最初から一本とられました」／と刑事は職業的に笑って、頭へ手をやった。  
刑事は単刀直入ではなく、やや迂回な方法で「訊問」に入ろうとしていた。しかし、傍線  
部のような細君の返答は自分の主張を全面に押し出したように思われる。この奥様の攻めと  
いう証言の展開は、刑事にとって、予期できぬものとなっている。そのため、刑事は波線部  
のような反応になったのである。そして続いて、刑事の「訊問」が次のように示されている。

「奥さんに先手を打たれたから、申し上げますが、実はその孔雀のお話で伺ったんです。  
富岡さんは特に孔雀がお好きと聞いたものですから」／「遠廻しに仰言るのは却って気持  
が悪いわ。つまり富岡が孔雀を殺したらしいつて仰言るんでせう」／「何もそんな」／と  
刑事はあわてて手を振った。／「だつて変ぢやありませんか。孔雀が殺されたからつて、  
孔雀好きの人を探して廻つたら、どうなるつて云ふんです。あなたは猫が好きな人はみんな猫を殺し、  
子供が好きな人はみんな子供を殺すつてお考へなんですか」／刑事はそこまで細君から言はれると、黙って怒ったふりをした。

傍線部における奥様の〈つつこみ〉のため、刑事が弱ってしまったと言える。刑事の「黙  
って怒ったふりをした」という表情は、刑事に属する職業的な「訊問」を行おうとしていた  
が、思う通りにできないために出たものだと考えられる。刑事はゆっくり富岡と二人きりで  
「訊問」を行いたがっていた。しかし、刑事は「富岡さんは特に孔雀がお好きと聞いたもの  
ですから」と具体的に説明し、自分の来意を告げつつも、奥様がそれに対し傍線部のような  
刑事の本心で考えていることを掘り出そうとしていたのである。奥様の〈つつこみ〉は刑事  
を「匙を投げた」境地に立たされたと言える。

そして、富岡ははじめて口を切った。

「まあ、さう先廻りをするもんぢやない」と富岡ははじめて口を切った。「来られた理由  
はわかつてゐる。私が事件の前の日に、一人で永いこと孔雀を眺めてゐたのを見咎めて、  
警察に告げた人がいるんだらう。ねえ、さうですね」／「お察しのとほりです」／と刑事  
は富岡に対しては故ら素直に出た。

引用した傍線部の富岡の言葉は、刑事の来意に当たったのである。しかし、それと同時に、  
富岡は自分を不利な立場に立たせたのである。こうした自分に不利な証言を語ることによっ  
て、証言に客観性を持たせようとする富岡の意志が刑事に伝わったのである。

また、刑事は富岡に孔雀が好きな理由を聞き出そうとしているが、「その目には刑事が期待  
したやうな過度の熱意もなく、その手には慄へもなく、彼はやすやすと、誰にきかれても恥  
かしくない食物の好悪を語るやうに言つた」ように語り、それは刑事の期待に外れてしまっ

た。さらに、「偏執的な人間が、どんなに乏しい語彙であつても、あらゆる言葉を狩り出して、一つの好みを熱情的に語つてみせる」と「偏執的な人間」という定義を持ち出して、判断を下そうとしていた。しかし、どうも富岡は「偏執的な人間」という種類に属していないようである。

刑事はいままで自分の積んだ経験や職業的な勘に頼り、「訊問」を行ってきた。しかし、富岡の件に限って、「職業柄あれほど人相に詳しい自分が、今までこの写真と富岡との相似に気づかなかつたのはいかにもふしぎである」「刑事の職業的判断を狂はせたのはふしぎなことだが、その欠け方が徹底的で、尋常でないのだ」などのように、いままで積んだ経験や職業的な勘が有効に機能していないことが分かる。

前述したように、刑事は孔雀殺しの犯人が孔雀好きな富岡という可能性が高いと思つていたため、富岡家を訪ね、「訊問」を行った。しかし、富岡夫婦との「訊問」で、刑事のいままでの経験を覆す要素があつたために、「訊問」の結論は、孔雀殺しの犯人は誰なのかわからないというものであつた。刑事は富岡が犯人か否か、どちらも取らず、中を取つたような形、いわば決定的な解釈の保留へと行き着くことになつたのである。刑事はここで「匙を投じた」のである。結局、いままで富岡に対する嫌疑などは単なる自分の主観的な判断だという可能性が高いと思ふようになった。このように、刑事は富岡が犯人である確証を得ることができないため、「刑事はおしまひに匙を投じた」のである。ここで、刑事も読者もいわば宙吊り状態におかれ、次の物語の進行に期待せざるを得ないことになつたのである。

このような境地に立たされた刑事は、美少年の写真を指したのである。

- ・刑事はしつかり礼儀を守らうと心に決めてきてゐたから、笑ひもせず、愣きも隠したけれども、さう思つてつらつら見ると、正にそれは富岡の少年時代の顔にちがひなかつた。
- ・なるほど、言はれてみれば、富岡の眉の形はその美少年の眉の形と同じである。澄んだ美しい目は似ても似つかず、目の下には皺が幾重にもふくらんでゐるけれど、その目の切れ具合は同じである。鼻の形も同じなら、酷薄な感じを与へる薄い唇も同じである。
- ・今の富岡はむかしの富岡の拙劣きはまる戯画のやうで、強い単純な線で特徴を誇張することなく、あんまり忠実に細部をなぞりすぎ、しかもそれを弱い崩れやすい、確信のない線で仕上げたので、かうも相似を失つた印象を与へるのであらう。／それが一旦、「私です」と言はれると、たちまち緒がほどけて、すべての相似が焙り出しのやうに浮き上つてくる。今は刑事も、それが富岡の少年時代の顔であることを疑はなくなつた。

傍線部は、刑事は美少年＝富岡という事実に対し、納得した内的な言葉である。ただし、「匙を投じた」刑事は、「言はれてみれば（略）同じです」「同じです」など、何回も繰り返すことによって、美少年＝富岡という事実に対する自身への言い聞かせでも聞こえてくるのであ

る。なぜかという、「職業柄あれほど人相に詳しい自分、今までこの写真と富岡との相似に気づかなかつたのはいかにもふしぎである」という箇所から、自分の職業柄の判断への自信が読み取れるためである。したがって、「言はれてみれば」美少年＝富岡だが、絶えず自分への言い聞かせから美少年＝富岡という図式への疑いも自然に露呈してしまうのである。

#### 四、細君の機能

刑事がかえったあと、夫婦の間には次のような会話を交わした。

「何を考へることがあるの。まさかあなたがやつたんじゃないでせうね」／「何を言ふんだ。ちやんとアリバイがあるぢやないかね」／「私が眠つてゐるあひだはわかりはしないわ」

以上の夫婦の間の会話を見てみると、細君はいままで「訊問」中、刑事の嫌疑に〈つっこ〉んできたが、本当は富岡の犯罪関与に自信を持っているわけではない。「訊問」中、富岡のために、刑事に〈つっこ〉んできたことは、富岡への夫婦愛のためだと考えられる。

しかし、その夫婦愛は刑事の視点から、いかがわしいものになっている。富岡と細君の関係をみると、「美の喪失という点においても共通している」<sup>7</sup>という指摘が見られる。確かに、細君は「むかしは輪郭鮮明な、花やかな顔立ちであつたらうに、その輪郭が崩れ、しかも小鼻や唇の角に強いくつきりとした線が残つてゐる」という箇所から、奥様の「美の喪失」が見られる。それと同じように、富岡にも「四十五歳ぐらゐのその顔が、ひどい荒廃をあらはしてゐるのにも気づいた」「富岡の顔を四十半ばでこんなにも荒廃させたものは」と「美の喪失」が描かれている箇所が見られる。したがって、先行論が指摘してきたように、二人とも「美の喪失」という点で共通していると言える。

しかし、刑事の観察によると、細君は美が喪失しただけではなく、他にもいくつかの特徴が見られる。

例えば、細君に関する箇所は「高圧的に」、「不快そうに顔をそむけて押し黙り」、「一途に不快げで」、「軽蔑の目で高所からちらと見やつた」などが挙げられる。さらに、「刑事のために出された茶が冷え、鶯いろの水面をこまかく縫ひ取つたやうに塵が浮んでゐた。永く掃除をしたことのないこの部屋では、いつもしづかに塵が零りつづけてゐるらしかつた」という箇所から、細君の怠けを意味していると考えられる。このように、細君と富岡の共通性が語られるのに対して、細君と対照的に描かれている点も無視できない。例えば「鬱陶しい、威圧的な感じを与へる」「声量のある、怒気を含んだ、抽象的なほど美しい声が叫んだ」という細君の描写に反して、富岡は「苛立つた様子も見せず、静かにしてゐる」「落着きとゆとりが

---

<sup>7</sup> 注4を参照。

見える」という描写が見られる。

このような「刑事の窺ふことのできない特殊な高い教養を積んだ形跡がある」富岡は、「このあたりの地主の息子」である。したがって、お金持ちの「名家」で教養のいい富岡は結婚相手としていくつかの選択肢があったはずである。細君のほうは、三十を越してからオペラ歌手になるのを断念し、富岡と結婚した。そのため、富岡はこのように夢を挫折し、また態度も悪く、家事も怠けている細君との結婚は何かの経緯があったと推測できる。なぜかという、このような細君との結婚は富岡にとってあまりにも不条理であるから。

細君は、富岡を対象化し、富岡との結婚は富岡にとってどれぐらい不条理なことであったのかを伝える機能を果たす存在である。この点で細君の存在は本作において重要なものとして機能していると考えられる。

## 五、孔雀の必然性

作品の「三」に入って、視点人物はいきなり刑事の視点から富岡の視点に変えた (わる)。「彼が夢のなかで犯した犯罪だつたのかもしれない」「さう思ふとき、富岡はすでに、自分が夢の中で犯したかもしれぬ犯罪を是認してゐた」などによって、犯罪をしたか否かによって富岡の疑わしさを露呈してしまう。

しかし、それに反して、「富岡は孔雀の殺される瞬間を見なかつたことが、一生の痛恨事だ」「あ、それを見なかつたのは俺の一生の痛恨事だ」と繰り返すことによって、富岡自身は事件に参加していないことを証明したのである。

そして、富岡は事件に参加していないが、孔雀の美、或いは犯罪を美化するという美意識の問題を語るのである。

例えば「千頭の牛を飼ひ、千頭の馬を飼ひ、あるひは千羽のカナリヤを飼ふことは、豪華と言へるかもしれないが、その殺戮は少しも豪華ではない」「生存し、飼はれることにもまして、殺されることが豪華だ」「孔雀殺しは、人間の企てるあらゆる犯罪のうち、もつとも自然の意図を扶けるものになるだらう。それは引き裂くことではなくて、むしろ美と滅びとを肉感的に結び合はせることになるだらう」などの箇所が挙げられる。つまり、孔雀の美を誇張にただけではなく、孔雀殺しという犯罪自体までも美化してしまった。

富岡からはもっぱら美への執着が読み取れる。それは容易に「怖ろしいほど嘗ての美が欠けてゐる！」自分を想起できよう。前節のように、富岡夫婦の結婚は富岡にとって不条理だと言える。また、毎日「退屈な倉庫会社づとめ」であったため、富岡の今の生活は閉塞的な状況に陥っていると想像できる。したがって、「怖ろしいほど嘗ての美が欠けてゐる」現在の富岡はM遊園地で孔雀（美）を眺めることによって、富岡の何かを喚起することができるの

である。

孔雀（美）を眺めることは、所謂美への接近だと解釈できる。富岡にはその美だった昔の自分の面影への名残があるため、このように必死な美への追求が見られるのである。富岡は繰り返し孔雀の美を述べ続けることによって、孔雀の美を自分の美の問題に置き換えているように、美への憧憬を何度も繰り返して語るのである。美への希求と閉塞的な状況にいるために身動きの取れない富岡像のありようが強調される。

富岡は「それから貴い血が、孔雀の羽根に欠けてみた鮮かな朱のいろが、どんなに華麗にほとばしって、その身悶えする鳥身に、美しい斑を盈かぐかが見られたことだらう」「しづかに土にしみる血」などのように、詳細に〈血〉が描写され、「殺戮の場面を思い描」いている。想像する際に富岡は「思はず熱して、拳を握りしめて、みひらいた目であたりを見まはし」たのである。また、富岡の「孔雀は殺されることによつてしか完成されぬ」という「結論」と合わせて考える場合、富岡は美への追求を通してはじめて自分が「思はず熱」くなる様子が見て取れる。富岡は美なる孔雀を眺めることによって、停滞状態のまま、単調な毎日を送っている自分への糧としているように解釈できる。したがって、犯罪現場に立ち入ることによって、富岡は孔雀の殺される現場をみることができ、美を欠いている自分が、美を始めて完成させるのである。このように、本作の「三」において、あえて富岡の視点を取り入れることによって、刑事が認識した富岡とは異なる、美への迫及、生きる問題と絡んでいる、富岡の側面が見出せる。そして、富岡の視点を通し、孔雀の美が詳細に描写されることが富岡の欠けている美を意識させるために必要なものでもあるのである。

したがって、富岡は何故孔雀殺しの犯人が決して野犬ではないことを知っているのだ。かということ、一番孔雀の豪華の美に通じ、また一番美を欠けている人間であるからなのである。

## 六、唐突な幕切れ

刑事は双眼鏡をとりあげて、目にあてた。その細身の体の男は、黒い服を着て、犬の鎖を両手に引いてみた。ふと月に照らされた白い顔を見て、刑事は声をあげた。／ それはまぎれもなく、富岡家の壁に見た美少年の顔である。……

作品はここで途切れている。しかし、何故孔雀殺しの犯人は「富岡家の壁に見た美少年」なのか。もし富岡＝美少年の図式であるならば、何故富岡は刑事の隣に座っているのか。作品がここで途切れたことによって、謎がそのまま未解決になってしまったのである。

しかし、「……」のように本作の結末は未解決であるのか。刑事の双眼鏡から見た孔雀殺しの犯人は「富岡家の壁に見た美少年」という表現によって、読者に富岡との関係性も想起させ、解釈の可能性を示唆することができている。

美少年と富岡は同一人物ではないが、美少年は富岡の形象の象徴だと考えられる。恐らく美少年は富岡と同じように、美への渴望、追求も持っている人間だと推測できよう。したがって、富岡は不思議的に獣医さんの説明（論者注：孔雀殺しの犯人は野犬）よりも的確に孔雀殺しの犯人の正体を把握できている。なぜならば、それは美への渴望の人間だけに分かっていることだから。

本作では孔雀殺しの事件を通して、読み手に生きる問題を意識させる、という方法を三島は用いている。

以上のように、詳細に分析した結果、「孔雀」は、主人公の生き方の問題と深く関与していることが分かった。「孔雀」の方法としては、作品が孔雀殺しの犯人探しで始まり、そして刑事の「訊問」に入る。形式的に志賀直哉の〈犯罪〉小説「范の犯罪」<sup>8</sup>の展開との類似性が指摘できる。犯罪、「訊問」という展開であるが、結局主人公の富岡の生きる問題と絡む。生きる問題と絡むことは〈犯罪〉作品の常套的な手法であるが、志賀直哉の「范の犯罪」における裁判官の「訊問」形式、范の生きる問題（「本統の生活」がないために、彷徨っている状態にある。）と類似している展開まで似通っている点は実に興味深いことである。そこから、志賀文学から受け継ぐような問題が横たわっているという可能性が見出せる。ただし、詳細については紙幅の都合のために、別稿に譲りたい<sup>9</sup>。

---

<sup>8</sup> 拙稿「志賀直哉「范の犯罪」論—「無罪」の意味—」『阪大近代文学研究』第六号、平成二十年三月

<sup>9</sup> 作品の引用は『決定版 三島由紀夫全集 二十』（平成十四年六月、新潮社）に拠る。